

●jaih-s 主催の「国際保健 学生フィールドマッチング」企画に参加して



「ケニア国ニャンザ州保健マネージメント 強化プロジェクト視察」レポート

神戸市外国語大学外国語学部国際関係学科 武 智 彩



サーベイランス同行で訪問した診療所

2011年夏、日本国際保健学会学生部会(jaih-s)主催の学生フィールドマッチング企画を通し、JICAのプロジェクトである「ケニア国ニャンザ州保健マネージメント強化プロジェクト視察」に参加しました。本研修では、隣国ソマリア保健省の方々に対する研修から、コミュニティヘルスワーカーの方々の仕事まで、行政のトップレベルからコミュニティレベルまで幅広い活動の見学をさせていただきました。



ホームステイ先の家族と共に

①Team Buildingの大切さ

ソマリア(正式にはソマリランド)の保健省の方々に対する

る研修の見学の際に印象に残ったのが、今まで顧みられてこなかったTeam Buildingに関するワークショップでした。ひとつのプロジェクトで、人々がチームとして協力しようというのは当たり前だと今まで考えていましたが、これまでのプロジェクトにおける失敗の原因の一つが、チームの協力関係が構築できなかったことにあると本研修を通して知りました。足並みがそろわなければ効果は上がらないという意識を徹底して持たせることの大切さに気づかされました。



サーベイランスの様子

②診療所への調査同行で感じたこと

この調査は数十に及ぶ質問に対し、7段階の評価で答えるものだったのですが、そこで感じたのは、数字での評価の限界でした。インタビューの中で、質問に対する受け答えと評価として答えた数字との差異を感じ、困っていることがあるなら遠慮なく答えとして示したほうがいいのと思うことができました。こうした調査で現場の本当の声を聞くには何度も対話を重ね、本音を伝えやすい環境づくりが必要であると感じました。

さらに調査同行でわかったのは、電気が使えない施設が多いことでした。出産を行う施設があっても、なにかあった時に電力が必要な機器は使えないし、もし、夜に出産を行うのであればどうやって明りを灯すのだろうかと思いまし

た。



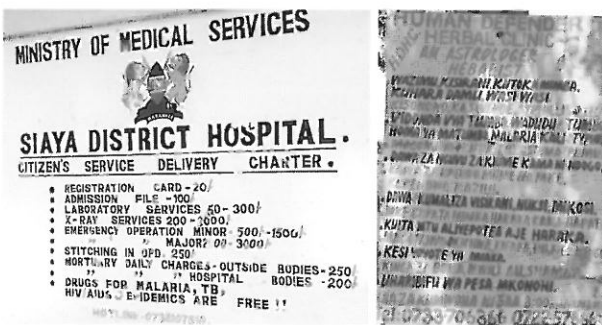
JICAオフィスのみなさと

③コミュニティヘルスワーカーの仕事の限界

コミュニティの人々の健康状態をチェックするために家々を回るコミュニティヘルスワーカーの人々は基本的にボランティアです。そのため、農繁期になると訪問の時間が取れず、報告では月を追うごとに訪問数が減っていました。せっかくトレーニングしても続かなければ意味がな

いので、数を減らすことにしたそうですが、ボランティアという形で続けていくこと自体に限界があるため、人数削減は問題解決につながらないと思います。彼女たちが、仕事を続けるためのインセンティブとなるものが早急に必要だと感じました。

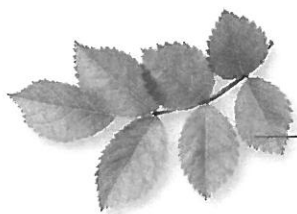
私の専攻は国際関係学で、国際保健に関する知識を学ぶ機会はほとんどありませんでしたが、本研修を通して、実際に現場で働く方々の仕事を見学し、本や論文では見えてこなかった問題を感じる機会に恵まれました。何より感じたのは、自分の住む国や地域のために何をすべきかを真剣に考え、取り組んでいる現地の人々の力強さです。将来、国際保健を担う人材になりたいと考えている自分にとって、本研修で得られたものは非常に価値のあるものでした。



県病院の診療費が書かれた看板/伝統医療の案内



ミツンバラムの子供たち



Bangladesh でみた人と人とのつながり

長崎大学国際健康開発研究科 修士課程1年 橋場 文香

Bangladesh には、途上国における国際保健プロジェクトの成功例の視察を目的とした、大学院の短期フィールド研修で訪れました。



BRACが支援する小学校にて

インドの東側に位置する Bangladesh は人口1億5000万人を超える国であり、人口密度は世界第5位です。首都ダッカに着くと、都会で育った私でも、人と車の多さと雑然とした雰囲気に圧倒されました。フィラリアで陰嚢が腫れた子供を抱えて物乞いをする10歳位の男の子や裸で路上に放置されて泣きじゃくっている赤ん坊、そして彼らを前に立ちはだかるビル。今回の訪問で、発展し続けるダッカで格差社会を目のあたりにし、世界の不平等・不公平について悶々と考えさせられました。

世界最大のNGO、BRAC^(注1)が行っているプロジェクト(例えば、都市スラムにおける母子保健のMANOSHI、水と衛生教育のWASH、貧困から脱却するためのSTUP)は、コミュニティ全体を巻き込んで実施されています。具体的には、村で権力者を巻き込んだcommitteeを形成し、月に一定の回数集まり、報告・連絡・相談を行っています。影響力をもつ権力者を巻き込むことでより支援の輪が広がるからです。Special Targeted Ultra Poor、STUPのcommitteeの話では、村の女性の家が災害で壊れた際には、募金をつくり彼女の家を建てかえる手伝いをしたと

聞きました。プロジェクトの対象者に対して、サービスを提供するだけではなく、彼らの周りの環境も考えているBRACそしてコミュニティ全体で支え助け合っている姿に感銘を受けました。Social Supportの有無は、メンタル面にも多大な影響を及ぼします。 Bangladesh の農村では、隣近所はもちろんのこと、村全体がどこに誰が住んでいるのかを把握しています。子供達は、皆自然と集まって走り回り、大人も誰の子構わず相手している状況でした。貧しくて経済的に辛い状況の上、孤独であれば更なる辛さをうみます。人が支え合っていく事は、本来の人間社会のありようではないでしょうか。人ひとりの力はちっぽけなものかもしれないが、人と人とのつながりがあれば、成しえる力は計り知れません。



BRACの衛生教育を受けていた村の女性

コミュニティレベルに限った話ではなく、人と人とのつながりの重要性は、ドナー側の機関の連携、国全体そして各レベル(県、郡、ユニオン)の連携に関しても言えることです。例えば、援助はドナーがいて初めて成り立つものですが、結果重視のプロジェクトを実施したり、自己中心的援助をするなど、ドナー側の都合を押しつけていいものではありません。今や数多くの機関が援助に入っており、連携は欠かせません。どう連携をとっていかかは、持続して考えなければならない課題である。援助される側の

人々が一体何を必要としているのかという相手側の視点につき、彼らを主体として対策を講じることが一つの解決策となっています。 Bangladesh の保健セクターでは、保健家族福祉省の中に保健サービス局と家族計画局が存在し、個別にサービスを提供し、重複している現状があります。効率を良くする為にも統合できる所はしたいものではありますが、既に存在しており統合できない以上、双方の連携は欠かせません。

幾度となく世界の不平等・不公平な状態に悩み続けていた私ですが、どんな形でもやはり人の為に何かをしたいという根本は変わりません。 Bangladesh での三週間は、人やコミュニティーの大切さや連携の大切さを私に改めて教え、モチベーションや向上心を与えてくれました。私ひとりが成し得る事は、この世界ではとてもちっぽけですが、パートナーシップを通して少しでも多くの人々の健康そして幸せに貢献していければと、新たな決意を胸に日々精進していこうと思います。

(注1) BRACは、貧困の状況に置かれている人々をエンパワーし、彼らの人生の変化をもたらすことを目的とした開発組織です。1972年に設立され、戦争中にインドへ大量に渡った難民への支援をしていましたが、今では貧困などの様々な難題に立ち向かい、開発の先駆者となって支援をしています。



村のcommitteeの話し合い

広告



世界の水をきれいにする

自然の悠久の中で棲息する
あらゆる生き物のために・・・

世界の水をきれいにする
アクアテック サラヤ

〒541-0051 大阪市中央区備後町4-2-3
TEL 06-6222-7890 FAX 06-6222-7870
<http://www.saraya-aqua.com/>